

霜降り

サイトー

老境を迎えようとする先生と中年男性が、カーテンで区切られた小さな部屋で向き合っていた。先生は一枚の写真を掲げた。赤身に白い脂身が霧のように広がっている。

先生は写真に見とれていた。中年男性は思わず口にした。「見事な霜降りですね」

「その通りだ。実に美しい。まるで紅色に染め上げた絹に大理石粉を流したようだ。これだけ芸術的に霜降りが広がるのは千分の一、もしくはそれ以下の確率かもしれない。いままで美食の限りを尽くしてきたが、霜降りの見事さではそれらを上回るな。ところで、君はなぜ霜降りが美味しく感じるのかご存知かな？」

中年男性は首を横に振った。

「霜降りとは赤身に中性脂肪がはいりこんだ状態のことだ。この中性脂肪は人間の体温より低温で溶解するため、口に入れると肉が溶けたように感じるのだ。さらに脂肪が挿入されたことにより筋肉繊維がほぐれ肉質が柔らかくなる。また、人間の舌は油脂があると旨味を強く感じる傾向にある。これらの相互作用により、霜降りは美味しく感じるのだよ」

「それは知らなかった。先生のお話は参考になります」

「そうであるう。ところで君は霜降りをどうやって育てるのか知っているかな」

中年男性はまたもや首を横にふる。先生は満足そうに大きくうなずいた。

「生育環境が重要であることは論を待たない。霜降りを作るにはでんぷん質、油脂といった高カロリーの食材を多く与え、かつ運動させないこと。ようするに強制的に太らせるわけだ。ビールを飲ませるのも効果があるようだ」

「そういわれると私の生活環境にそっくりですね。油物は大好物だし、ビールも毎晩だし。とても健康的とはいえませぬよ」

「その通り。そもそも霜降りは筋肉にとって正常な状態ではない。つまり病気ということだ。不健康な肉ほど美味になるとは、現代文明に対する皮肉であるかもしれない。ところで、面白いことに過剰カロリーを与え運動を制限したとしても、全ての家畜が霜降りになるわけではない。実は環境以外にも大きな要因があるのだ」

「そうなのですか」

中年男性は大きく身を乗り出してきた。先生は男性の興味をより引き出すために、少し間をおいた。

「正解を明かすと遺伝子なのだよ。霜降りになるには、ある特定の

遺伝子を引き継ぐことが必要なのだ。つまり、美しい霜降りには神様からの贈り物なのだよ」

「生まれつきですか。これは驚いた」

「四万頭弱もの子供を残した有名な種牛に糸福号がいる。肉質極めて優秀で豊後牛の改良に大きく貢献したのだが、この糸福号由来の肉質から霜降り遺伝子が発見されたのだ。遺伝子工学が進んだ現代ほど優秀な遺伝子が求められている時代はない。つまり、優秀な遺伝子を手にしたものが、食肉市場を制するのだ」

中年男性はなんともうなずいた。が、気がついたように質問をした。

「ところで先生。今日は肺ガンの検査だと聞いていたのですが、なぜお腹のCTスキャンを取るのでしょうか。スライドに掲げられた画像も私のお腹ですよ。まあ、確かに私が霜降りだということは認めますが、それと肺ガンにどのような関係が……」

慌てた様子で先生は咳払いをした。

「いや、その、ガンは転移が怖いからね。そのための検査だよ。そうそう、正確な判定のためには組織を切り取る必要があつてな。それと念のために精巢の検査もしたほうがいいかもしれん。なあに心配するな。精子を少し採取するだけだ。では、さっそくだがこれらの検査に必要な同意書にサインを……」

中年男性が注視するなかで、先生は何度もつばを飲み込んだ。